決戦態勢を固めよ

発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町2
電話8033 7140番
編集兼発行人　北岡　隆

安保改定を阻止しよう

岸政府はアメリカと組んで世界の大勢に逆行し安保改定のため渡米、十九・二十日に調印が予定されている。われわれが総力を発揮すれば、この策動は必ずくいとめることができる。あと一ふんばりだ、頑張ろう

配轉團交ついに決裂

ロック・アウト狙う會社

一方的に一・二一四名にたいして「指名クビ切り」を強行したうえ、さらに職制支配の復活強化によるドレイ労仂のおしつけをネラう会社は、一月七日に再開された第三回山元配転団交で、組合の誠意をふみにじり、あくまで一方的にクビ切り合理化を前提とする人員配置と、職制支配の強化を主張してゆずらず、ロック・アウトの挑発をネラう会社はあえて交渉を決裂にもちこんで、七日午後四時半団交は決裂した。組合は、ただちにこの攻撃と対決して闘う指令をだし、緊急支部委員会を招集して態勢確立にあたった。

全国の働く仲間たちからおくられた団結の輝をかみしめ、闘う決意をあらたにし、一月五日には山ノ上クラブにとけ込んだクビ切り幹部にたいして、上空からヘリコプターでクビ切り状をたたきかえして、一九六〇年のたたかいにたちあがったが、一月七日ひらかれた山元配転団交で、会社はあくまでクビ切り合理化を前提とする配転計画と職制支配強化の前提条件九項目を主張してゆずらず、昨年末以来三回を重ねた配転団交はついに決裂した。

交渉決裂時の双方の主張点の主なものは次の通りである。

（会社の主な主張点）

イ、約八〇〇名の希望退職と、約一・二〇〇名の指名クビ切りで人員は減少したが出炭はいままでより増産して日産一〇・〇〇〇トン出すことにする。

ロ、そのため希望退職や、指名クビ切りで職場に約二・〇〇〇名のバがあいたのでこれを埋めあわせるための配転をやりたい。

ハ、従って、いままでの約束やとりきめ、慣行などにかかわりなくこれからは係員の指示どおりに一切苦情をいはずに働け。

二、組合が反対しても会社は個々人の配置換えの希望調査を強行する。

（組合の主な主張点）

イ、首切りはやらないといっていた長計協定をはじめ、協約、協定をふみにじって強行した会社の勝手なクビ切りは、絶対にみとめられないし、そのためにわれわれは闘っている。だから会社が一方的にやったクビ切りの穴埋めをするような配置転換はみとめられない。

ロ、中山あっせん案がだされたとき組合は、誠意をつくして中央交渉を申入れたのに、会社はそれを断ったため中央交渉は決裂している。だからこの問題についての交渉権は中央（三鉱連）にあり、三池には権限はない。従って二重交渉になり、さらに中央に提案されているクビ切り合理化の一切を認めることを前提とした山元配転交渉には絶対に応じられない。

ハ、もし、会社がどうしても話合いをしたければ、社長から三鉱連の委員長にまず、クビ切りを撤回して一切の諸問題についての交渉を申入れるべきである。

二、しかし、炭鉱は自然条件を相手に仕事をする特殊な環境下にあるので、たとえば宮浦三五昇部内のような出水事故などの非常事態がおこり、これの保安作業や作業所を失った者の配転。また三川の第七下層部内などのように、部内が終掘して、作業場がなくなり新しい部内に移動しなければならない場合などの配転については、労資双方とも中央交渉事項に対する基本的な考えを固執することなく、従来の慣行にもとづいて実施すべきである。その場合組合としては会社が一方的、命令的でなく従来の慣行に従って交渉を申入れてくれば当然交渉に応じる。

ホ、このほかにも保安上や緊急な場合で配転の必要があればその都度話合う。

以上でもあきらかなように会社は筋の通らない勝手な主張をくり返えすばかりであったが、さらにその最終態度として、次のような通告を強行してきた。

「係員の指示に従って誠実に仕事をして貰いたい。その他至極常識的な運営上の問題を、中央事項なりとして拒否されることは納得できません。更に会社としては、不正常な状態をこのまま放置するわけにはまいりませんので、適正配置を実施するために配転希望調査を実施致します。なお部内移動については新部内でもあり、適正な条件をもって早急に結論を出したいと思います」

この通告は、われわれは係員の指示を無視して、常識的な職場運営をみだし、職場は不正常な状態に荒れているなどと、一方的に事実をまげてきめつけている悪質なものである。

これほどわれわれを馬鹿にしたいい方はない。われわれをまるで乱暴者でなまけ者のようにいっているが、事実は決してそうでなく、保安や人権を無視した一方的な指示をおしつけた場合に限って職場交渉を行うが、そのほか普通の場合は係員の指示に従って誠実に仕事をしているのである。会社こそ大がかりなクビ切りを強行して三池炭鉱を荒しているのである。

強行措置を粉砕しよう

会社が全く道理にあわない一方的な配転計画をおしつけてきたことから、われわれは次のような会社のネライがあることをはっきりと見ぬく必要がある。

(1) 会社は〝石炭産業は斜陽だ〟〝三井鉱山は赤字だ〟だからクビ切り合理化をやるといっていたが、浩動家をクビにし、組合を骨ぬきにして、職制支配の復活強化をはかり、ドレイ労働をおしつけようとしていることにその本心があること。

(2) 一方的な配転計画のおしつけを行い、組合がこれを拒否した場合、ロック・アウトの挑発をかけ、全国の働く仲間につつまれて、ますますひろがり高まっていく闘いにたいして組合の戦力消耗をネラっていること。

(3) 組合の反対にもかかわらず、適正配置という口実をつくり、個々人の配転希望調査を強行することによって、私たちの統制と団結にヒビを入れようとする〝組織ゆさぶり〟をネラっていること。

会社の組合を無視する強行措置を粉砕するため炭労中闘指令第一七三号にもとづく三池労組の闘争指令第一六号がだされた（指令は八日付発行の伝単参照）

各支部では直ちに緊急支部委員会を開き、態勢確立をはかった。

会社が配置転換を申入れた裏には組合が配転を拒否したからという口実をもうけ、ロック・アウトを強行しようというかくされた意図があるとみなければならない。長期ねばりづよく闘うというわれわれの戦力消耗をはかろうとしているのである。

岸渡米に抗議

中央・地方で一大闘争

安保改定に反対する世論を強引に押しきって、岸首相は一月十六日に渡米、十九日か二十日ごろには調印が予定されている。

これに対し岸渡米抗議闘争を展開し、当日は空港やその沿道に大動員をかけ、全権団に抗議、圧力を加えることになった。

福岡県共闘会議ではつぎのスケジュールで行動することになった。

十三日　各地区で調印反対国民総決起大会をひらき、中央派遣代表を選出する。

十四日　「県中央総決起大会」をひらき政府に抗議するとともに派遣代表を激励する。

十六日　東京における岸調印渡米抗議集会に県代表が参加する。

前進

当面の闘争重点をどこにおくか

配転団交も去る七日ついに決裂した。

中央における合理化提案そのものを、ふたたび山元における団交に持ち出した会社側の態度は、首切りを前提とした配転計画の強引な押しつけであり、しかも、その前提条件として中央の交渉事項を一切持込んでいる。

このような会社提案は、労仂組合という名前がつき、しかも闘っている組合としてこれを諒承するということはでき得ない。従ってわれわれは毅然たる態度をもって組合の最後的態度を表明した。

しかし、会社側はあくまでも基本方針通り強行実施する決意を表明しているので、一方的な希望調査や配置転換、あるいは業務命令が出るであろうことを、われわれは十分予期してかかる必要があるであろう。

このような中で現状分析をおこなうと、会社側の出方としては、これら一連の強行策を打出し、内部的な攪乱をねらい、組織の分断工作を中心として進めてくるであろうことを考えなければならないその上に立って会社側のロック・アウトが予想される。

このように狂暴化した会社側を前にして、むしろ非常なあせりがあるのは、一種のジレンマ的な状態に落ちいっていると判断しても差つかえなかろう。従って、このような状況下における会社側の出方は、一途を辿り、昨今の貯炭状況では平常貯炭を既に切つたとも報道されている。

もちろん、三池の貯炭はほとんど皆無に等しく、会社がロック・アウトと生産の二つの問題に対する、一種のジレンマ的な状態に落ちいっていると判断しても差つかえなかろう。従って、このような状況下における会社側の出方は、あらゆる策を弄しても、まずわれわれ内部の分裂、切り崩しに最重点をかけるであろう。

そのためには手段を選ばず、あらゆるデマ宣伝を行い、さらに三鉱連・炭労・全総評といった組織の中にもクサビを打ちこんでくるであろうことを、われわれは十分警戒してかからなければならない

従ってわれわれは、まず組織をガッチリと固め、敵の乗ずるスキ間を与えないように注意を払い、さらにわれわれの闘争を全労仂者のものにするために、あらゆる努力を払わなければならないだろう

以上の点を要約すると、(1) 会社の一方的な配転や業務命令を完全に何ら躊躇することなく拒否すること。(2) 分裂支配に絶対に乗らないこと、そして組織をますます強固な団結で固めること。(3) 闘いを真に全労仂者のものとするためのオルグ活動を積極的に行い、来たるべき炭労中央委員会、あるいは炭労大会にその結集をはかり、春闘とともに全労仂者の総反撃を行う不退転の基礎作りをすることが最大急務である。

全組合員は以上の三点に重点をおき、当面の行動としなければならない。

そして、会社の狂暴化の土台が「安保体制」であり、われわれのたたかいが、その打破につながることもまた自明である。